

県道円座中津線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

清次郎原遺跡 上ノ原稻荷塚古墳

2002

大分県教育委員会

県道円座中津線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

清次郎原遺跡 上ノ原稲荷塚古墳

序 文

八面山の尾根から続く中津市南部の「下毛原丘陵」と称されるこの一帯は、いにしえ人が生活する上に適した環境であったと考えられ、原始から古代にかけての遺跡が豊富に点在しています。

本書は、平成12年11月中旬から平成13年2月下旬にかけて大分県教育委員会が実施した県道円座中津線道路改良工事に伴う、清次郎原遺跡・上ノ原稻荷塚古墳の発掘調査報告書です。清次郎原遺跡では弥生時代中期の溝が発見されました。上ノ原稻荷塚古墳は7世紀の周溝をもつ墳墓で副葬品として珍しい銅製の人形が出土し、この地域の社会の歴史を知る上で注目される資料となりました。

本書が埋蔵文化財に対する保護・保存並びに教育学術の振興及び地域文化の向上のために活用されることを期待いたします。最後に、この調査に御協力いただきました関係各位に対して、心から感謝申し上げます。

平成14年3月29日

大分県教育委員会

教育長 石川 公一

例 言

1. 本書は、平成12年度に実施した中津市大字加来所在の清次郎原遺跡及び中津市大字上ノ原所在の上ノ原稲荷塚古墳発掘調査の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、両調査とも県道円座中津線道路改良事業に伴い、中津土木事務所の委託により大分県教育委員会が実施したものである。また、平成13年度には発掘調査報告書作成に向けての整理作業を行った。
3. 遺構の実測及び写真は文化課職員が行った。
4. 遺物実測については清次郎原遺跡は井川泰成が、上ノ原稲荷塚古墳を五十川雄也、遠部慎が行った。
5. 遺跡出土遺物並びに遺構・遺物の実測図は大分県教育委員会文化課文化財資料室に保管している。
6. 本書の執筆は、清次郎原遺跡は井川泰成が、上ノ原稲荷塚古墳を五十川雄也が担当し、編集を井川泰成が行った。

目 次

第1章	はじめに	1
	1 調査にいたる経過	1
	2 調査団の構成	1
第2章	地理的歴史的環境	2
第3章	清次郎原遺跡	5
	1 調査の概要	5
	2 遺構と遺物	5
	3 まとめ	6
第4章	上ノ原稲荷塚古墳	7
	1 調査の概要	7
	2 上ノ原稲荷塚古墳の調査	8
	3 その他の遺構	12
	4 まとめ	13

写真図版

- 図版1 上ノ原稲荷塚古墳遠景・全景（カラー）
- 図版2 上ノ原稲荷塚古墳・主体部（カラー）
- 図版3 墳丘状況
- 図版4 東側・北側周溝工層、主体部検出状況
- 図版5 石室出土状況、玄室奥壁状況、青銅製品出土状況
- 図版6 石室完掘状況、1号土坑完掘状況、1号溝完掘状況
- 図版7 現地説明会、作業風景
- 図版8 出土遺物



清次郎原・上ノ原稲荷塚古墳遠景（北西から）

第1章 はじめに

1 調査にいたる経緯

中津市大字加来に所在する清次郎原遺跡と大字上ノ原に所在する上ノ原稲荷塚古墳の発掘調査は、平成8年に計画され平成12年より実施している県道円座中津線道路改良工事に伴う、事前の緊急発掘調査として実施した。

平成12年度初めに県土木建築部から他の事業とともに分布調査依頼が県教育委員会文化課にあり、県文化課は分布調査を行い、本工区が遺跡存在の可能性が非常に高いため事前の試掘調査が必要な地区と回答した。これを受けて県事業担当部局の中津土木事務所は、用地買収などの条件整備の整った対象地区ごとに試掘調査の依頼を県文化課に行い、県文化課が清次郎原遺跡は平成12年10月に、上ノ原稲荷塚古墳は平成12年12月にそれぞれ試掘調査を実施した。試掘調査はともに住宅地であった対象地区用地に重機でトレンチを入れる方法で行ない、その結果、両調査区とも遺構を確認したため本調査が必要との所見を得た。

本調査は、清次郎原遺跡が平成12年12月11日～平成12年12月19日まで7日間実施し、上ノ原稲荷塚古墳は平成13年2月5日～平成13年3月2日までの約1ヶ月間行った。

2 調査団の構成

清次郎原遺跡

調査主体	大分県教育委員会 教育長 田中恒治
調査組織	山本芳直（県文化課長） 伊藤正行（参事兼課長補佐） 清水宗昭（同） 栗原 眞（同埋蔵文化財第二係 副主幹・調査担当） 井川泰成（同 主任 ・調査担当）

上ノ原稲荷塚古墳

調査主体	大分県教育委員会 教育長 田中恒治
調査組織	山本 芳直（県文化課長） 伊藤 正行（参事兼課長補佐） 清水 宗昭（同） 高橋 信武（同埋蔵文化財第二係 副主幹・調査担当） 五十川雄也（同 嘱託 ・調査担当）

第2章 地理的歴史的環境

1 地理的環境

大分県北部に位置する中津市は北を周防灘に面し、東は宇佐市、南は下毛郡三光村、西に福岡県築上郡吉富村、大平村に接している。人口69,013人、面積5,567km²、福岡県との県境をなす山国川が西を北上し、周防灘へ注いでいる。沖積作用により沖代平野や河口部には三角州が形成されている。また、市の東部には標高30mほどの下毛原丘陵が広がっていて、清次郎原遺跡、上ノ原稲荷塚古墳もこの丘陵上に所在する。

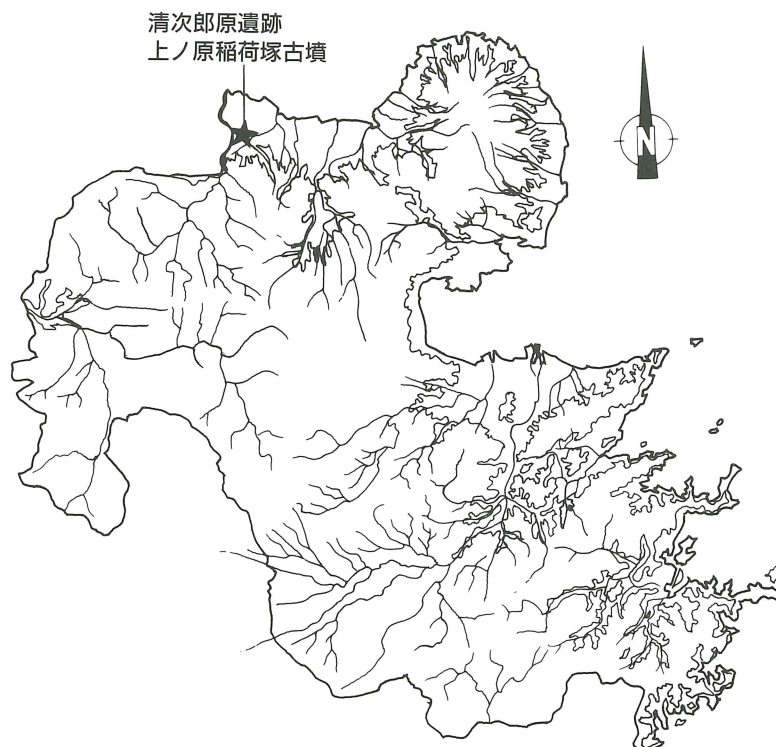
2 歴史的環境

古くから人々は山国川や犬丸川沿いに遺跡を残している。旧石器時代の遺跡は少ないが、上ノ原遺跡では細石刃や剥片が出土、縄文時代になると、遺跡の数は増大する。時期としては後期の遺跡が多く、犬丸川流域の棒垣遺跡や集落と貝塚で構成された入垣貝塚が代表的である。上ノ原平原遺跡では石鏃が出土している。山国川右岸自然堤防上にある佐知遺跡では縄文後期の竪穴住居が見つかった。

弥生時代になると遺跡の範囲は拡大していき、森山遺跡、樋多田遺跡、福島遺跡、上ノ原平原（A）遺跡、など、台地上の大集落や沖積平野内の低地に足跡をたどることができる。中でも森山遺跡は台地上に展開する集落遺跡の全容を検出できた遺跡として注目される。

古墳時代になると集落遺跡の佐知遺跡、上万田遺跡などが微高地につくられる。また山国川沿いの丘陵上や崖面には古墳・横穴墓が築かれている。主なものとして相原古墳群や上ノ原横穴墓群、さらに8世紀初から9世紀の勘助野地火葬墓群とつづく。生産遺跡としては伊藤田城山窯跡群、瓦が迫窯跡群、草場窯跡群など古墳時代～平安時代の須恵器を製作した窯跡が現れる。

律令時代の遺跡としては相原廃寺や周辺の三口遺跡がある。沖代平野の条里水田から収穫された米を収納する下毛郡の郡衙に付属した正倉と目される長者屋敷遺跡などがあげられる。

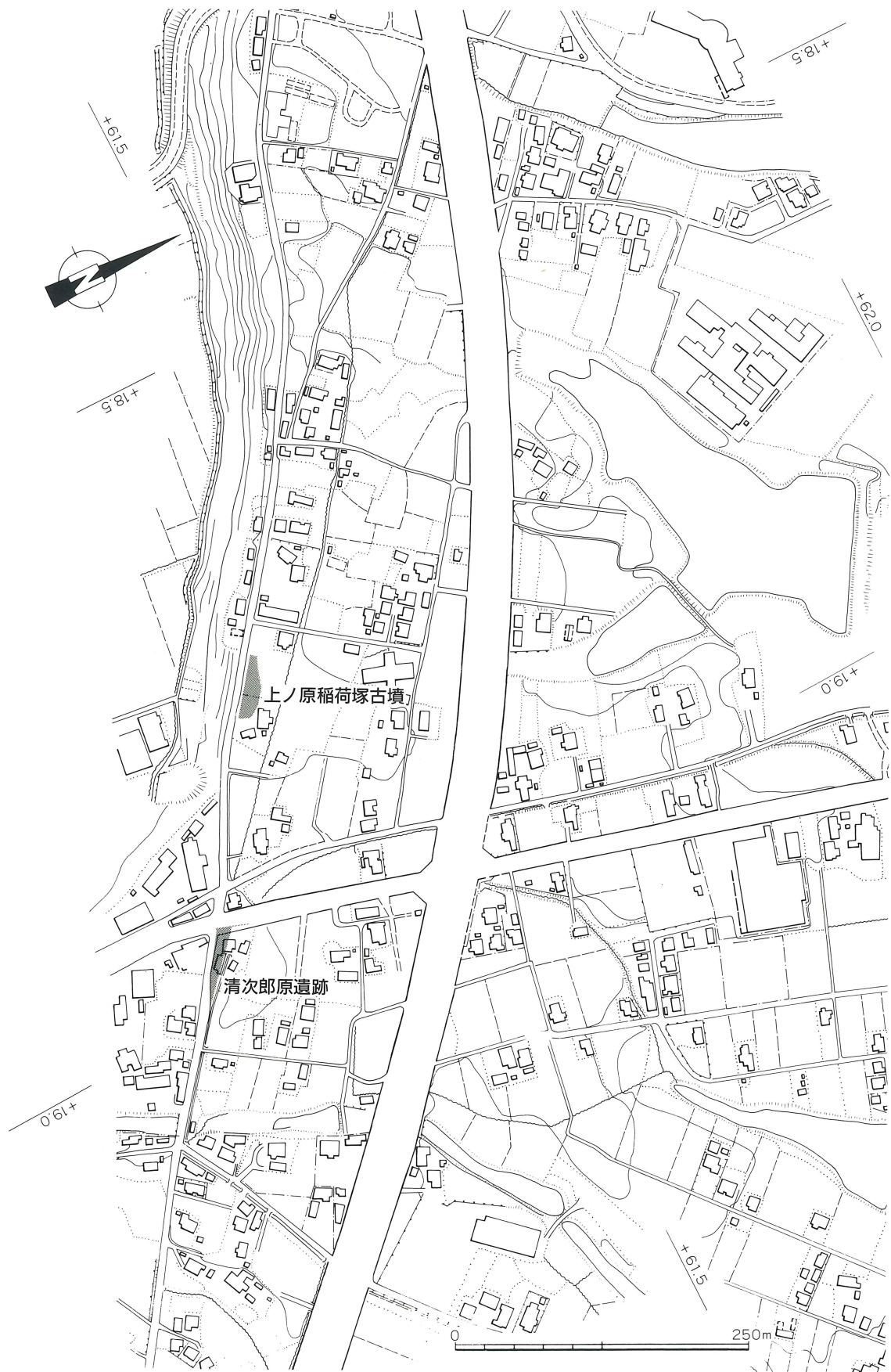


第1図 遺跡の位置



第2図 清次郎原遺跡・上ノ原稻荷塚遺跡周辺遺跡分布図（国土地理院『土佐井』1/25,000により掲載）

番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	上万田遺跡	12	相原古墳群	23	諫山遺跡	34	倉迫平1号墳
2	三口遺跡	13	幣旗邸古墳	24	城の百穴横穴墓群	35	野辺田横穴墓群
3	川下遺跡	14	上人塚古墳	25	臼木古墳群	36	洗添横穴墓群
4	下唐原遺跡	15	勘助野地遺跡	26	成恒遺跡	37	樋多田遺跡
5	永添中園遺跡	16	上ノ原横穴墓群	27	庵ノ尾横穴墓群	38	北平横穴墓群
6	西永添遺跡	17	柳ヶ迫東遺跡	28	鴨山横穴墓群	39	森山遺跡
7	梶屋遺跡	18	上ノ原平原遺跡	29	瑞雲寺遺跡	40	宇土横穴墓群
8	台遺跡	19	六畝町遺跡	30	岡崎遺跡	41	犬丸川流域遺跡群
9	坂手前横穴墓群	20	大池南遺跡	31	天神原横穴墓群	42	岩井崎横穴墓群
10	鶴市神社裏山古墳	21	佐知遺跡	32	三ツ塚古墳群	43	清次郎原遺跡
11	坂手隈横穴墓群	22	原口遺跡	33	倉迫二ツ塚古墳	44	上ノ原稻荷塚古墳



第3図 清次郎原遺跡・上ノ原稲荷塚古墳周辺地形図

第3章 清次郎原遺跡

1 調査の概要

清次郎原遺跡は、中津市大字加来に所在する。遺跡は山国川右岸の標高30m余りの洪積台地上に位置する。

遺跡は県道円座中津線道路改良事業に伴う試掘調査で確認された。

今回設定された調査区(2図)は、約300㎡ほどの面積で、ほぼ現道と同じレベルで続く地形に住宅地として利用されていた。そのため遺跡は住宅の基礎や掘削などで攪乱が激しく、遺構はその多くが削平を受けていると思われ、遺構の確認はわずかであった。

表土剥ぎをした結果、現地表面より30~50cm下で遺構を確認することができ、溝状遺構1条と土坑3基、ピット等を検出した。

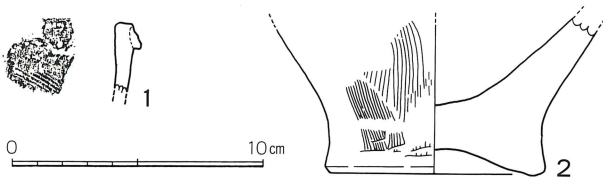
2 遺構と遺物

1号溝(第4図)

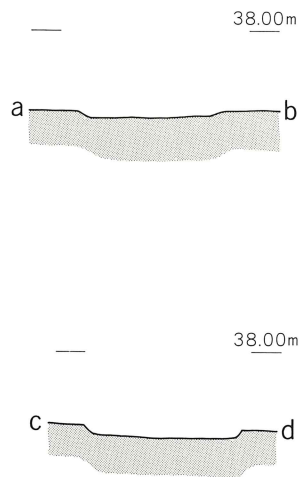
調査区のほぼ中央にあり、東西に延びている。溝の規模は幅約1m、深さ約10cmほどであり、削平を受け、底がわずかに残るだけであった。

この溝状遺構より試掘時も含めて弥生中期の甕の底部と、それと同一個体と思われる口縁部や胴部など土器片が数点出土した。なおこれら遺物はいずれも遺構の床付近から出土している。他の遺構からはいずれも遺物は検出されなかった。

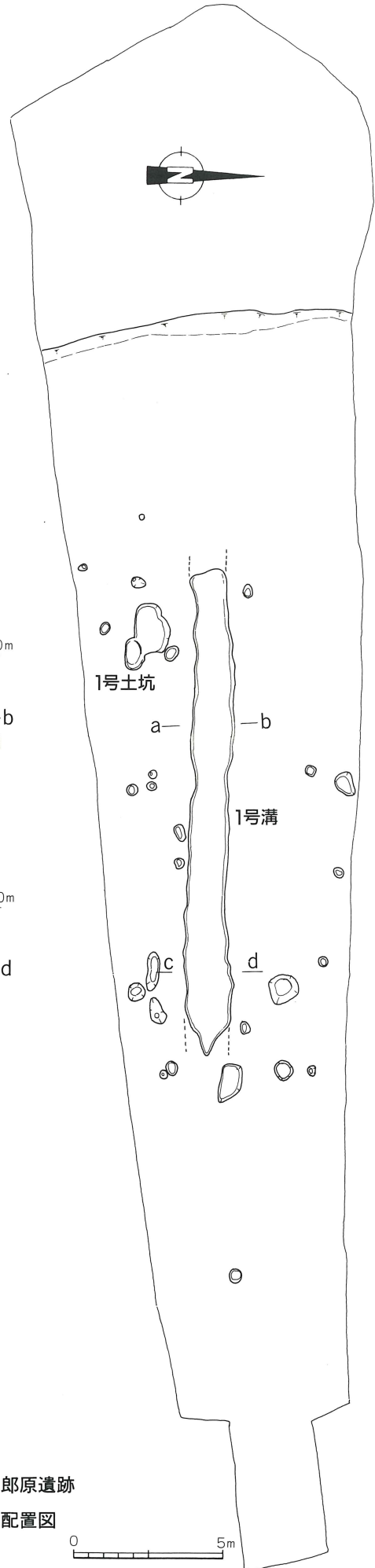
1号溝 出土遺物(第5図1-2)



第5図 清次郎原遺跡1号溝出土遺物実測図(1/3)



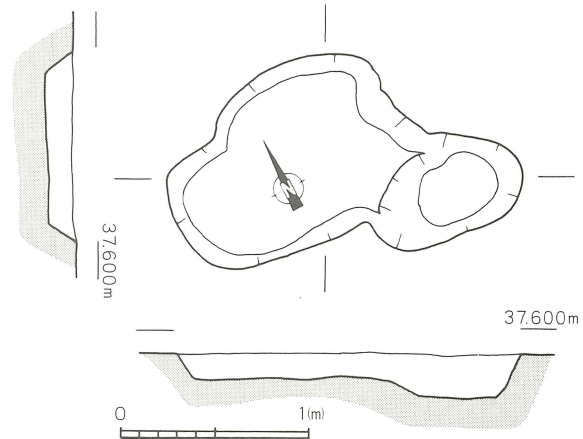
第4図 清次郎原遺跡
遺構配置図



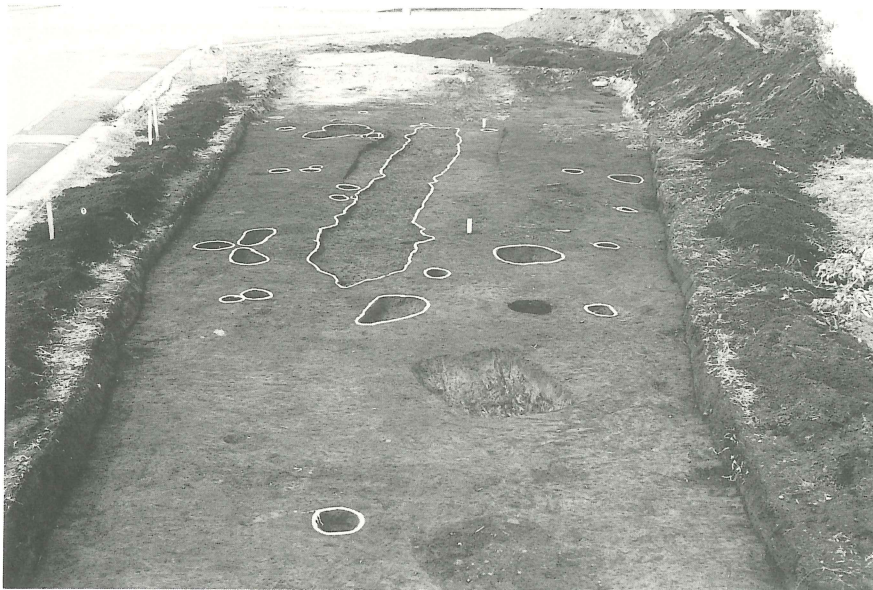
遺物は土器細片で、図化可能な遺物は2点である。1は下城式甕型土器の口縁部である。口縁部直下に刻目を施した貼り付け突帯を廻らしている。突帯部下にハケ目が認められる。胎土は石英、角閃石を含み、色調は外面がにぶい赤褐色内面は黄褐色を呈している。2は試掘で検出された下城式甕型土器の底部である。底部径8cm、残存高6.3cmで上げ底状を呈している。色調は外面が橙褐色、内面は淡黄褐色を呈しススの付着がみられる。胎土は石英を多く含み、角閃石、長石もわずかではあるが認められる。外面調整は、縦方向に細かいハケ目が明瞭に施されており、底部は指ナデ調整されている。内面は、大部分が未調整であるが一部ナデがみられる。焼成は良好である。

1号土坑（第6図）

溝状遺構の南側、調査区中央やや西寄りにある。平面プランは不定形で、長軸は188cm、短軸100cm、2段に掘り下がり、最深部は深さ25cmである。出土遺物はない。



第6図 清治郎原遺跡1号土坑実測図（1/40）



清次郎原遺跡近景（東から）

3 まとめ

下毛原丘陵上には古くから人々の生活の営みがなされてきた。清治郎原遺跡は、標高30mの丘陵上に展開する弥生時代中期の遺跡である。周囲には小さな地形の起伏があり、谷状地形をなす場所が多くみられる。

弥生時代になりこの小さな谷部にわずかな湧水を求めて水田を営みながら、小規模な集落を丘陵上に点々と形成させていたと考えられ、それも長期にわたるのではなく比較的短期間に営まれた生活遺跡をみることができる。大池南遺跡や上ノ原平原遺跡などがその例である。清次郎原遺跡もそれらと同様の性格と思われ、地形が遺跡の東側へなだらかに傾斜し、湧水の得られる谷部に向かい、水田など何らかの生産基盤の土地利用がなされていたと推測される。台地上の集落の展開やこの地域の水田開発の歴史をたどる上で、貴重な資料の一つとなると考えられる。

第4章 上ノ原稲荷塚古墳の調査

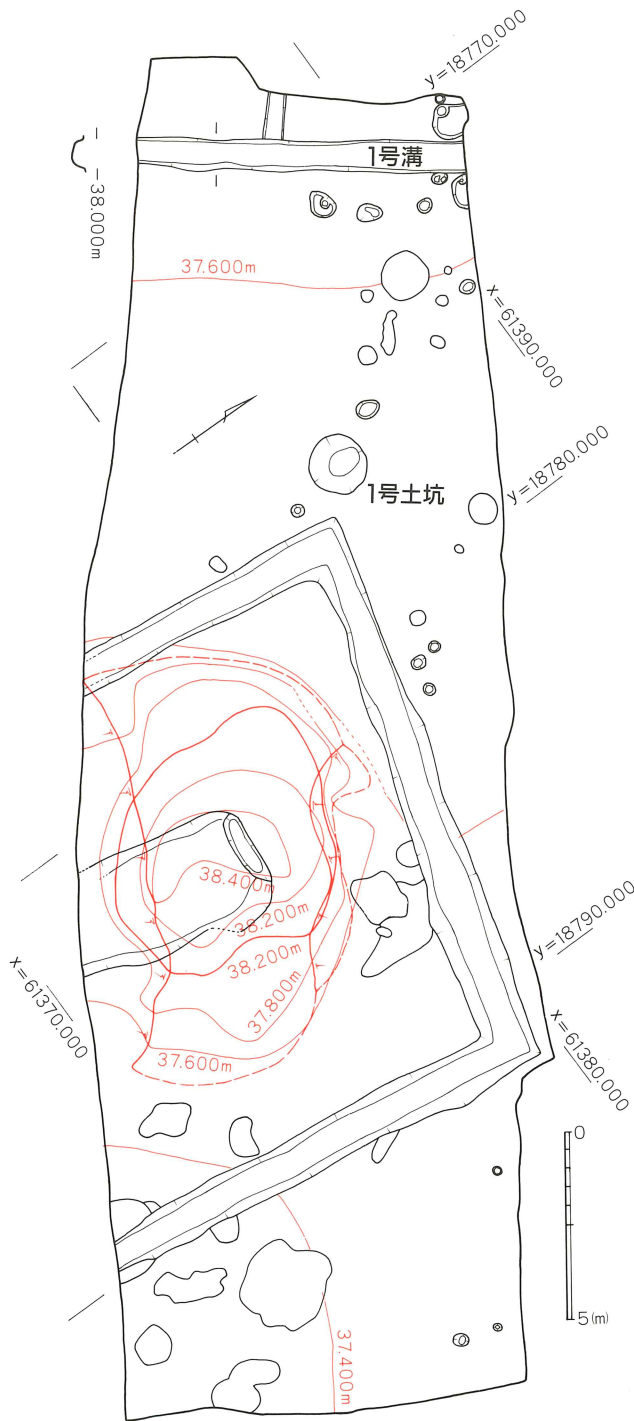
1 調査の概要（第7図）

上ノ原稲荷塚古墳は、山国川東岸にある洪積台地の下毛原台地南側縁辺部に位置している。この縁辺部周辺は上ノ原遺跡群に属し、上ノ原横穴墓群をはじめ、勘助野地遺跡や幣旗邸古墳1号、2号などの調査により、この一帯が古墳時代から古代にかけての墓地群となっていることがわかっている。上ノ原稲荷塚古墳は、調査以前はその墳丘の最高所に、「お稲荷さん」を祭っており、古墳としての周知はまったくされていなかった。ところが試掘調査でトレンチをいれたところ石室の側壁腰石が露出し、またその墳丘周囲を周溝が廻っていることが確認され、はじめて石室及び周溝をもつ古墳であるということがわかった。

現状での墳丘規模は高さ約1.5mで、墳丘の残存範囲は直径約8～9mほどである。周溝は幅1.5m、深さ0.5mである。古墳全体の規模は、周溝の廻っている範囲が東西方向で15.3mである。南北方向では南側が調査区外のため確認できないが、推定で15mほどと思われる。周溝はほぼ方形に廻っていたと推定される。調査は墳丘頂部に基準杭を設定し、これを基準に土層確認のベルトを東西南北に設定して、表土を除去し、墳丘の構築状況及び主体部の検出を試みた。主体部はその内部から近現代の瓦などが出土し、また側壁の石材がほとんど抜かれていたことから大きく攪乱を受けていることがわかった。

遺物は周溝内及び墳丘、主体部から須恵器や土師器の破片また鉄釘や青銅製品などを確認した。

その他の遺構としては、土坑1基、溝1条が確認できた。あとは攪乱が目立つのみであった。その攪乱の中には、石室の腰石の石材になってもよいと思われる石が入っていた。この稲荷塚古墳の石材の一部かもしれない。



第7図 遺構配置図 (1/20)

2 上ノ原稲荷塚古墳の調査

(a) 位置と現状 (第8図)

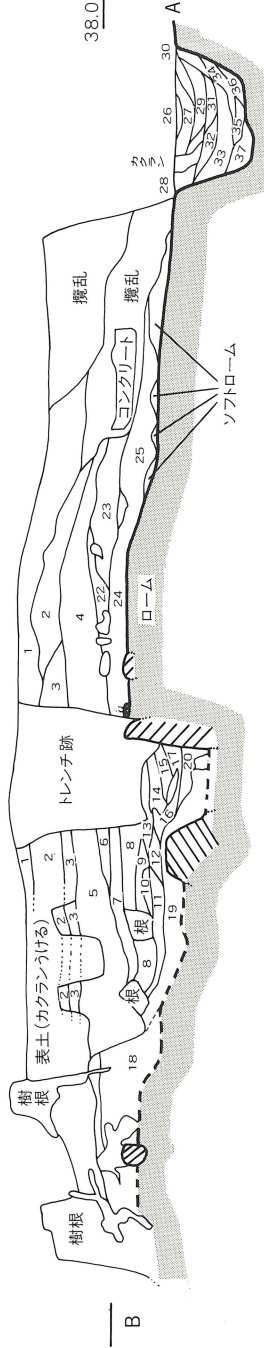
上ノ原稲荷塚古墳は下毛原台地の南端にあり、その台地縁辺部の西側1km弱の範囲に上ノ原横穴墓群や勘助野地遺跡などが立地している。墳丘は中央部が残存するのみでその周辺部は削られる。その規模は現状で幅9mほどで高さ約1.5m、周溝の範囲から復元できる推定の墳丘の規模は幅12mくらいであろう。主体部は南側に開口していた。



第8図 上ノ原稲荷塚古墳 (1/100)

39,000m

38,000m

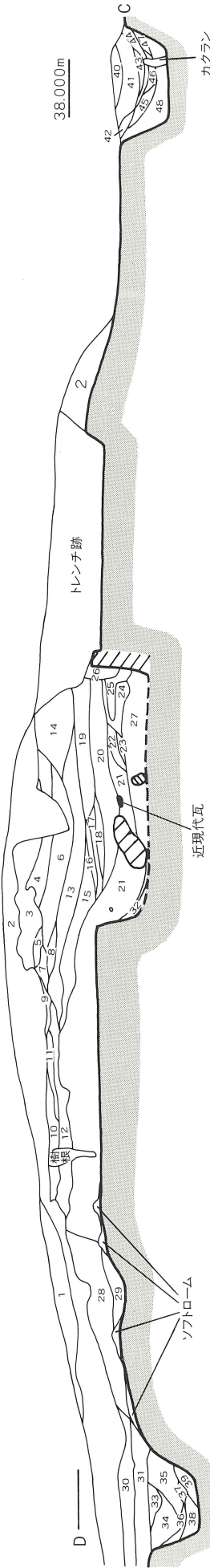


墳丘南北土層断面図

- 1層 表土
- 2層 褐色土上に黒色土混じる。
- 3層 褐色土
- 4層 黒色土
- 5層 褐色土と黄褐色土混じる。
- 6層 黒色土。しまり強い。
- 7層 暗褐色土
- 8層 褐色土
- 9層 褐色土(6層より明)
- 10層 黒色土。しまり強い。
- 11層 暗褐色土
- 12層 4層と同。
- 13層 暗褐色土。バサバサしている。
- 14層 暗褐色土。しまり強い。
- 15層 黒褐色土
- 16層 黄粘土と暗褐色土の混じり。
- 17層 暗褐色土。バサバサしている。
- 18層 暗褐色土
- 19層 黒褐色土
- 20層 黒褐色土。バサバサしている。
- 21層 16層に類似。黄土が大粒。
- 22層 14層と同。
- 23層 黒色土。旧表土。
- 24層 黒褐色土
- 25層 黒褐色土
- 26層 黒褐色土。バサバサしている。
- 27層 黒褐色土
- 28層 黒褐色土
- 29層 黒褐色土
- 30層 黒褐色土
- 31層 褐色土
- 32層 暗褐色土。粘り強い。
- 33層 暗褐色土
- 34層 暗褐色土。粘り強い。
- 35層 褐色土。黄土を微量に含む。
- 36層 褐色土
- 37層 暗黄褐色土。地山の土を少し含む。

39,000m

38,000m



墳丘東西土層断面図

- 1層 黒褐色土。本来墳丘土。二次堆積
- 2層 表土
- 3層 褐色土上に黒色土が混じる。
- 4層 黒褐色土と褐色土の混じり。
- 5層 黄褐色土
- 6層 黒褐色土
- 7層 暗褐色土
- 8層 黄褐色土
- 9層 5層に類似。
- 10層 3層に類似。
- 11層 黒色土
- 12層 5層に類似。
- 13層 褐色土
- 14層 3層に類似。
- 15層 黒色土
- 16層 黒色土。しまり強い。
- 17層 暗褐色土
- 18層 白色粘土
- 19層 黒褐色土
- 20層 黒褐色土
- 21層 黄褐色土
- 22層 黄褐色土と暗褐色土の混じり
- 23層 暗褐色土。しまり強い。
- 24層 2層に類似
- 25層 2層に類似
- 26層 黄褐色土
- 27層 暗褐色土。小粒を混入した黒褐色土。
- 28層 暗褐色土。しまり強い。
- 29層 暗褐色土
- 30層 黄褐色土
- 31層 暗褐色土
- 32層 黒褐色土
- 33層 暗褐色土。しまりや強い。
- 34層 暗褐色土。しまりや強い。
- 35層 暗褐色土。34層よりしまり強い。
- 36層 やや明るい暗褐色土。
- 37層 36層に類似。
- 38層 36層に類似。
- 39層 35層に類似。
- 40層 灰褐色土。バサバサしている。
- 41層 黒色土
- 42層 褐灰色土
- 43層 灰黒色土
- 44層 灰褐色土
- 45層 褐灰色土。黄褐色ブロックを含む。
- 46層 褐灰色土
- 47層 灰褐色土
- 48層 褐色土。黄土を少量含む。

0 2 4 (m)

第9図 土層断面図 (1/60)

(b) 墳丘 (第8・9図)

地山整形

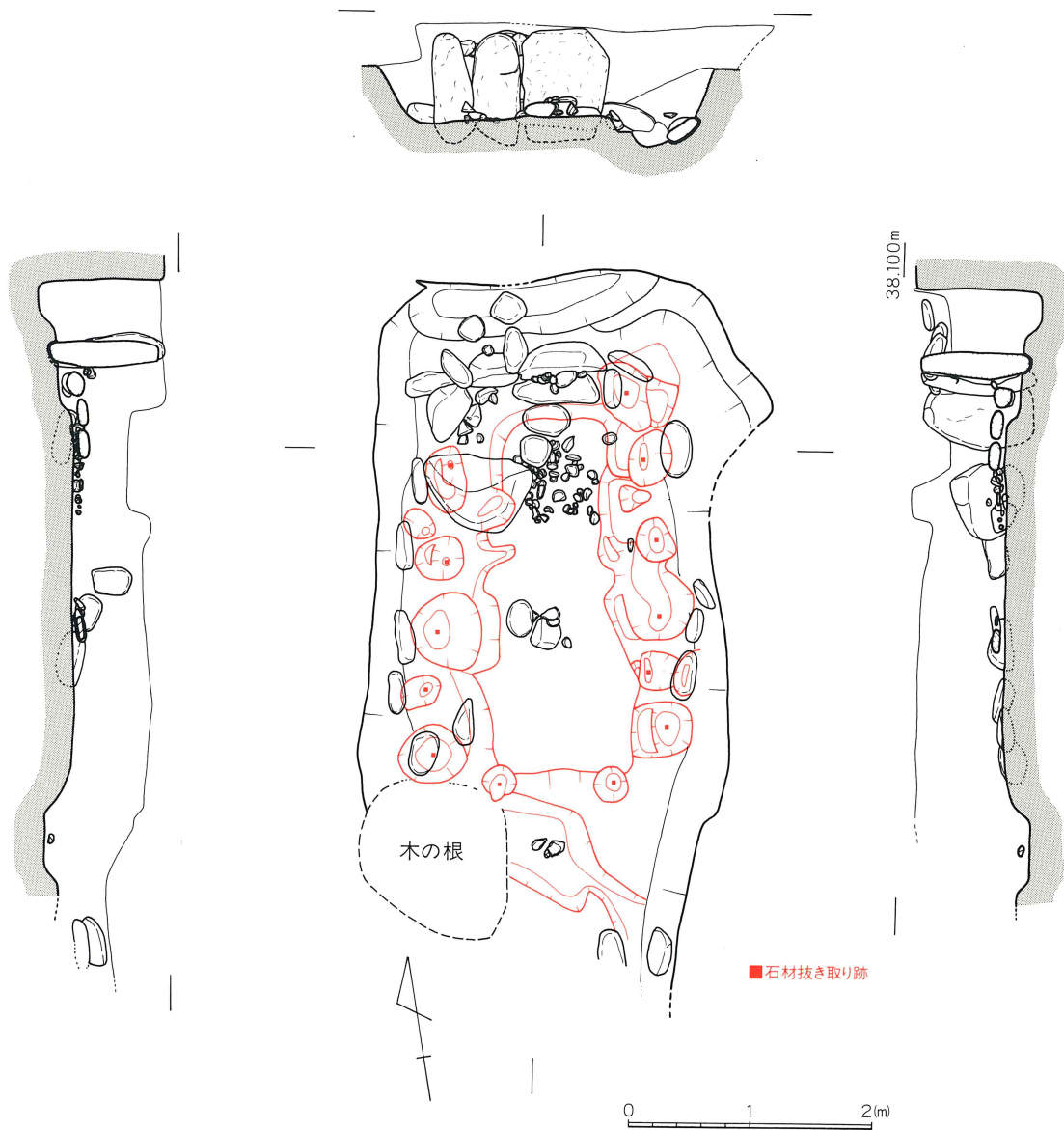
現状の墳丘表土から約0.5m~0.6mのところの主体部付近で旧表土が観察できた。あらかじめ主体部構築時にまず旧表土を簡単に整地する。そして主体部構築に際して地山を掘り下げている。

墳丘

墳丘は現状で幅9mであり、推定復元では12mくらいと思われる。樹根の攪乱のため土層観察が厳しい箇所もあったが、旧表土から現状の表土までは基本的に黒褐色土・褐色土・黄色土を盛り上げている。中には硬化している層もあるが、きちんとした版築技法などは用いられていないようで、ただ簡単に盛土している。そのため墳丘の形状を維持できずに墳丘土が周溝の外まで流出していた。

(c) 周溝 (第8・9図)

周溝は3辺が確認できた。南側は調査区外のため確認できない。主軸は主体部主軸とほぼ同じである。北東部と北西部のコーナー部分はシャープに屈曲する。規模は幅1.5m、深さ0.5mで、東西の最大幅は15.3mを測る。検出した状況から墳丘をほぼ方形に廻るものと推定される。



第10図 主体部実測 (1/60)

(d) 埋葬施設 (第10図)

埋葬施設は主軸をN-12.5-Eにとり、ほぼ南北方向を軸としている。主体部は南の台地の落ちに向かって開口する両袖型単室石室である。玄室は前述したが大きな攪乱を受けていた。羨道及び墓道は調査区外のため明らかでない。石室の石材はすべて河原石を使用している。

石室掘り方

地山整形面より掘り下げられ、北側は一部整地面からの掘り込みも確認できる。規模は長さ5.5m + α 、幅2.7~3.2mを測る。最終的に残存していた奥壁の石材などを除去し完掘した。

玄室

残存していた石は奥壁に使用されていた腰石3固体のみで、奥壁に向かって左側壁の腰石が1つ倒れた状態で出土した。また奥壁や両側壁には腰石の裏込めに使用されていたと思われる石が等間隔をおいてあった。玄室構造は腰石の抜き取り痕などから両側壁には6個体ずつの腰石と2個体の袖石が配置されていたと推定され、両袖式の単室であることがわかった。規模は奥幅1.0m、前幅1.4m、長さ3.2mで奥壁側の方がすぼまり、プランは縦長の台形を呈している。羨門部は幅0.6mである。床面には拳大の石と20~30cmほどの石が検出され、このような石が床面に敷き詰められていたと推定される。

羨道・墓道

この施設は調査区外との境のため、羨道の一部を除いて確認できない。羨道部は左側を木の根で攪乱されている。右側は地山の掘り方がつづき、その壁際に玄室の腰石の裏込め石と類似する石が同じレベルで確認できた。このことからすると羨道部にも腰石が廻った可能性もある。羨道規模は長さ1.3m + α 、幅1.5m + α である。

閉塞施設

袖石痕の手前に幅60cm、深さ15cmほどの掘り込みがあるが、これが閉塞施設の痕跡だろうか。

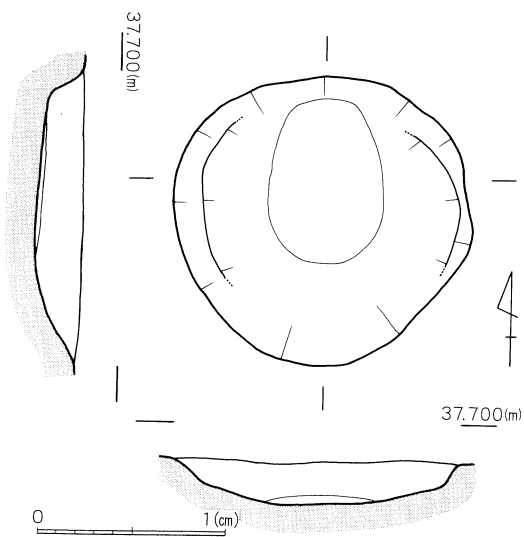
(e) 出土遺物 (第11図)

1~7は須恵器である。1は須恵器蓋で焼成は良好、色調は灰白黄色である。2は須恵器蓋で焼成は良好、色調は灰白色である。3は須恵器蓋で焼成はやや不良、色調は黄灰色である。4・5は須恵器碗の口縁部である。4は角閃石などを含み、焼成はやや不良、色調は灰~黄灰色である。5は白色粒子を多く含み、焼成は良好、色調は灰黄色~灰赤褐色である。6・7は須恵器甕片である。6は胎土に白色粒子や角閃石を含み、焼成は良好、色調は暗灰色を呈する。外面は格子目タタキ、内面は粗く同心円当て具痕が残る。7は胎土に黒色粒子や白色粒子を多く含み、焼成は良好、色調は灰白色である。外面上部には波状文が1条と自然釉がかかる。内面には粘土を下から上にナデあげている痕跡をのこす。8・9は土師器である。8は土師器皿で、口径12.0cm、底径7.2cm、器高2.4cmを測る。胎土には黒色粒子・白色粒子・赤色粒子を含み、焼成は良好で、色調は赤褐色である。調整は外面はナデ及び手持ちヘラケズリで、内面はナデと暗文を放射状(一部格子目状)に施す。9は脚部である。胎土は石英・長石・角閃石・白色粒子を含み、焼成は良好で、色調は黄褐色である。脚の短い脚付き皿か。10は青銅製品で、最大長6.8cm、最大幅1.8cmである。色調は緑色。欠損している箇所と生きている箇所がある。また上部に穿孔が1つある。11~18は鉄釘である。詳細は表1を参照。19は墳丘の表採である。肥前系陶磁器碗で、口径8.6cm、底径4.1cm、器高8.6cmである。色調は白黄色で、時期は18世紀代である。



1~3, 8, 10~17, 18 → 玄室内出土
 4~7 → 周溝内出土
 9 → 墳丘出土
 14 → 墳丘表採

第11図 出土遺物実測図（工器1/3、鉄器1/2、青銅器1/1）



第12図 1号土坑実測図（1/40）

第13図 1号土坑出土遺物実測図（1/3）

3 その他の遺構

(a) 1号土坑（第12・13図）

調査区の中央やや西側に検出した。平面プランは東西軸南北軸とも1.5mほどのほぼ円形で深さは0.2mである。遺物は一点のみ出土した。土師器高台部で、焼成は良好で、茶褐色である。時期は不明である。

(b) 1号溝（第17図）

調査区の西で検出した。幅は0.8m、深さ0.27mである。遺物は出土していない。

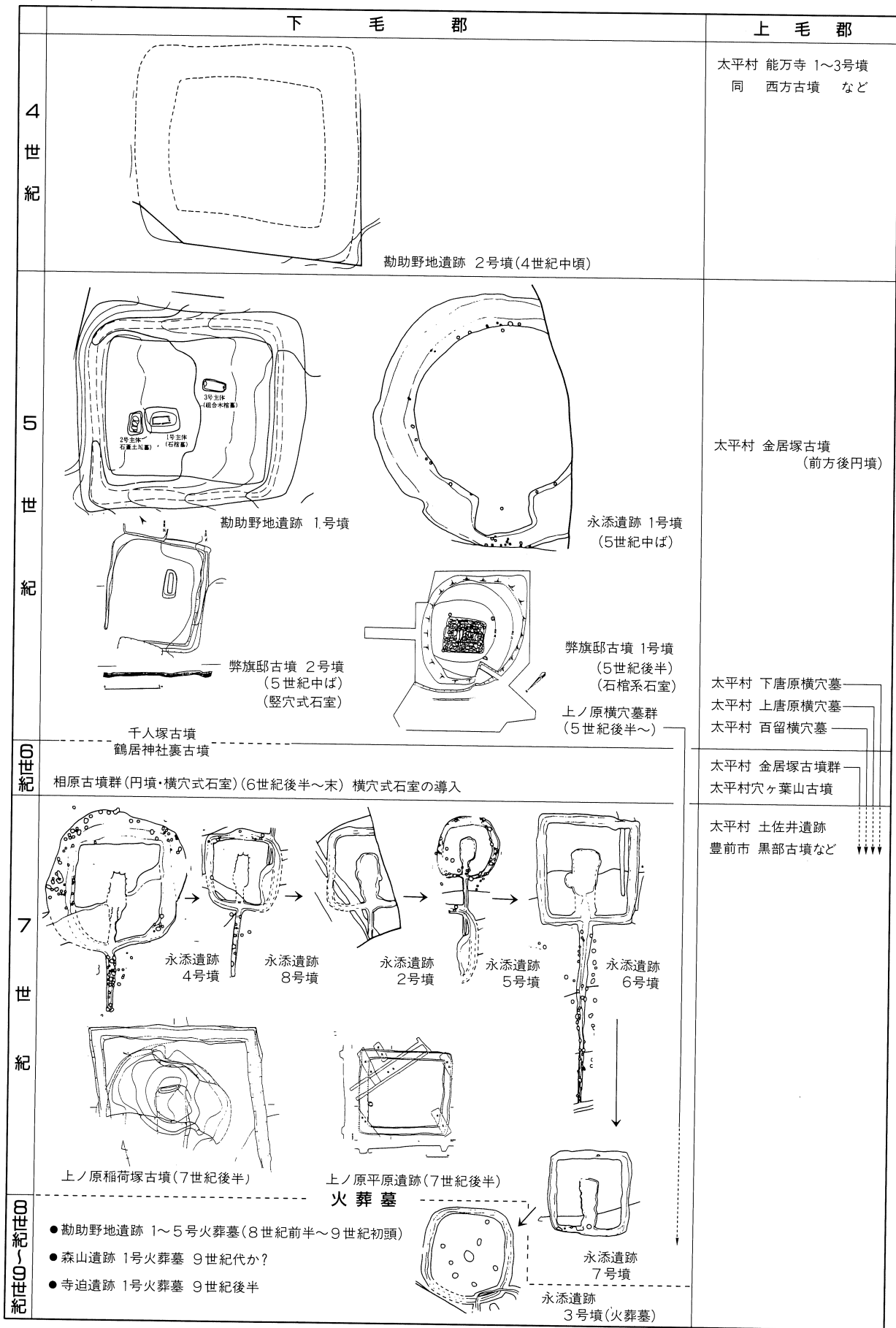
4 まとめ

上ノ原稲荷塚古墳は、古墳1基、土坑1基、溝1条を調査したものである。この古墳は、今回の調査ではじめて確認され、低墳丘の両袖単室横穴式石室の形態をもつということが明らかになった。ただ墳丘はかなり土が流出し、遺存状態は悪く、主体部もかなりの攪乱を受けていた。出土遺物も攪乱を受けていることからごく少数の出土にとどまった。しかしその中にはこの上ノ原稲荷塚古墳の時期と埋葬形態を窺い知るうえで欠かせない資料もある。まず上ノ原稲荷塚古墳の時期であるが、主体部から出土した須恵器蓋3点と周溝から出土した須恵器甕片と椀片から、少なくとも7世紀後半の時期が与えられよう。また玄室内から鉄釘が合計8本出土したことは木棺での埋葬を行っていた根拠となろう。さらに玄室奥壁と左側壁とのコーナー部で腰石を固定していた石の直上に青銅製品を確認した。この青銅製品はひとがた（人形）もしくは装飾製品の一部とも思われる。ひとがた（人形）の場合、古代の九州では福岡県沖ノ島祭祀遺跡（註1）5・20号遺跡より金銅製人形が出土している。5号遺跡に関しては半岩陰・半露天祭祀跡で7～8世紀の時代であり、上ノ原稲荷塚古墳と同時期にあたる。その他にも沖ノ島1号遺跡、露天祭祀跡で滑石製の人形も出土しており、8～9世紀の年代が与えられている。その他にも西日本では各地で土製人形や木製人形が出土している。金属製の人形が出土した沖ノ島5・22号遺跡と上ノ原稲荷塚古墳遺跡出土の青銅製品を見比べた場合、上ノ原稲荷塚古墳出土の青銅製品は人形と断定するには見劣る部分もあり、現段階ではこの青銅製品が人形とは断定できない。

玄室構造に関して、下毛原台地上には上ノ原稲荷塚古墳と同時期の古墳である永添遺跡（註2）がある。この永添遺跡の2・4・5・6・7・8号古墳の玄室プランは縦長方形で、中でも4・8号墳に関しては奥壁に向かってすぼまる傾向があるようで、このことは上ノ原稲荷塚古墳の玄室プランと類似している。さらに永添遺跡と共通することは玄室に使用されている石は腰石のみで天井石や腰石の上にさらに石を積上げたようなものはまったく見当たらなかった。ということは稲荷塚古墳も永添遺跡も小型の石室であり、天井部は木材などで簡潔に覆い（註3）、その上に盛土しただけであろうか。

ところで古墳時代に入ると山国川を挟んだ東西の丘陵地に多数の墳墓が造営されていく。下毛地域では古墳時代から古代に至るまでの墓域の選定地が、下毛原台地の南端の山国川流域全体を見通すことできるところや下毛原台地の中でも高所の場所であった。そのため、古墳時代から古代という流れの中で容易に墓の構造の変遷を追うことができることは、他地域をみても稀で古墳築造から火葬墓に至るまでの変遷がわかる特異な地域の1つであろう。この墓地変遷に関しては村上久和氏（註4）や坂本嘉弘氏（註5）の先行研究があるが、それら研究をふまえてここで簡単に概要を述べてみよう。（第14図参照）。

まず4世紀に上毛郡の大平村には能満寺1～3号墳、西方古墳などが造営され、下毛郡には勸助野地2号方形墳が出現する。この2号墳は本調査はされていないが試掘調査の折り、周溝から4世紀代の特殊器台の小片が出土した。この時期の埋葬主体部は石棺墓、粘土郭、石蓋土抗墓、土坑墓などである。5世紀にはいと上毛郡では前方後円墳である金居塚古墳や百留横穴墓群、上唐原横穴墓群、下唐原横穴墓群が7世紀頃まで造営される。5世紀の下毛郡では勸助野地1号方形墳が初頭～前期、また中ごろには永添遺跡1号墳、続いて後期にかけて幣旗邸1号（石棺系石室）・2号（竪穴式石室）が連続して築かれる。この他にも千人塚古墳や鳥居神社裏古墳があるようであるが詳細はわからない。また5世紀後半段階から上ノ原横穴墓群の造営が開始される。6世紀は、上毛郡は太平村金居塚古墳群や穴ヶ葉山古墳などが造営され、尾根の斜面に横穴式石室をもつ群集墳が造られる。一方で6世紀の下毛郡では、墳丘をもつ古墳の築造は後半段階に相原古墳群が知られるのみでいったんおさまり、上ノ原横穴墓群の隆盛が目覚ましい。7世紀以降は、上毛郡では太平村土佐井遺跡や群集墳が残るのみである。一方で下毛郡では、上ノ原横穴墓群が衰退期に入り（追葬自体は断続的に9世紀まで続くようであるが）、今度は下毛台地の縁辺部と永添に方形に巡る周溝と低墳丘をもつ横穴式石室が出現するようになる。特に台地の縁辺には7世紀後半にこの上ノ原稲荷塚古墳や上ノ原平原遺跡（註9）、永添遺跡では7世紀以降8世紀後半までに6基の周溝を巡らす墳丘墓が造営される。その後上ノ原では勸助野地遺跡にみられる5基の火葬墓があり、もっとも古いもので8世紀前半に出現し、展開していくことになる。また永添遺跡でも火葬墓の調査がなされ、少なくとも8世紀後



第14図 上毛郡・下毛郡の古墳~古代にかけての墓墳変遷図 (スケールはすべて1/500に統一)

半には火葬墓に転換していったようである。また少し距離はにおいて、南方の八面山から北方にゆるやかにのびる低丘陵でも森山遺跡や寺迫遺跡などで9世紀段階の火葬墓が調査されている。

以上のように古墳時代から古代にかけての墳墓の変遷を山国川東西地域の展開をみてきた。山国川東西地域の墳墓の変遷は坂本氏が指摘しているとおおり、特に6世紀以降その内容や継続性のうえでは西岸の方が墳墓の変化に富んでいることはいうまでもない。また坂本氏は山国川東西地域のその差異を「後背地形の差である」としている。なるほど当時の後背地形の差が水田、集落、墳墓の形成に大きな影響を及ぼしているということは大変興味深く賛同できる。だが東岸地域で7・8世紀に上ノ原横穴墓群が衰退したのち、また台地の縁辺部に上ノ原稲荷塚古墳や上ノ原平原遺跡（註10）、永添遺跡など低墳丘の横穴式石室が造られたという新資料の出現で様相はどう変わるのだろうか。その地形の差のほかにもその他の要因があるのかもしれない。ここで村上氏は7世紀の上ノ原横穴墓群の急激な減少を「墓域が当初より分割専有されていたため、新たに造墓する余地がなく他の造墓地へ移行した結果であるのか」としている。時期的なことを考えてみても上ノ原横穴墓群から台地縁辺部の上ノ原稲荷塚古墳、上ノ原平原遺跡、また永添遺跡などに造墓地が転換していつているようで、村上氏のいう見解は妥当なところであろう。こののち8世紀前半、おそくとも8世紀後半段階には火葬墓への変化がとげられているようである。今回調査した上ノ原稲荷塚古墳は、7世紀後半の年代が与えられることから、下毛地域で横穴式石室から火葬墓に転換していく中で、火葬墓に至る前段階の古墳として追認する資料となった。

最後に上ノ原稲荷塚古墳と永添遺跡の古墳はその形態や大きさなど類似点が多く見受けられる。この上ノ原稲荷塚古墳と永添遺跡の実際の直線距離は1kmにも満たない。ここでその被葬者像の問題がでてくる。律令時代中津地方は4郷に分割（大家・野仲・小楠・諫山）される。永添遺跡はその立地から大家郷に比定されている（註7）ようであるが、立地の観点から考えるとその中でも諫山郷は低湿地である三光村佐知を中心とする地域とされている。そうした時に下毛原台地の南斜面のきわに造られた佐知の低湿地を見下ろせる上ノ原稲荷塚古墳や上ノ原平原遺跡は諫山郷の有力者の一族と考えることもできるだろう。このように墳墓の形態やまた火葬墓に転換していく時期は郷による大差はなかったものと思われる。

註(1) 宗像神社復興規成会 1958年「沖ノ島一宗像神社沖津宮祭祀遺跡」

宗像神社復興規成会 1961年「続沖ノ島一宗像神社沖津宮祭祀遺跡」

宗像神社復興規成会 1979年「宗像沖ノ島」

(2) 栗焼憲児 1993年「永添遺跡」中津市教育委員会

(3) 村上久和氏 御教示

(4) 村上久和 1991年「上ノ原墳墓群の変遷」「上ノ原横穴墓群Ⅱ」大分県教育委員会

(5) 坂本嘉弘 1991年「上ノ原台地周辺の集落・耕地・墓地の変遷」「上ノ原横穴墓群Ⅱ」大分県教育委員会

(6) 村上久和 1988年「勘助野地遺跡」「中津バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ」大分県教育委員会

(7) 栗焼憲児 1995年「幣旗邸古墳1号墳」中津市教育委員会

(8) 村上久和 1984年「幣旗邸古墳」中津市教育委員会

(9) 栗原 眞他 2000年「上ノ原平原遺跡」大分県教育委員会

(10) 註(9)の遺跡の中で1辺8mほどの1号方形周溝墓の遺構から7世紀後半段階としている須恵器が出土している。主体部は削平により不明であるが、時期的にも上ノ原稲荷塚古墳や永添遺跡の時期に相当し、同じような周溝を巡らす墳墓であったのではないかと筆者は考える。

(11) 村上久和 「森山遺跡」1992年「中津バイパス埋蔵文化財調査報告書(3)」大分県教育委員会

(12) 小林昭彦 「寺迫遺跡」1992年「中津バイパス埋蔵文化財調査報告書(3)」大分県教育委員会

写真図版



上ノ原稲荷塚古墳遠景(南より)



上ノ原稲荷塚古墳遺跡全景

図版 2



上ノ原稲荷塚古墳（真上）



上ノ原稲荷塚古墳主体部



墳丘状況（北より）



墳丘掘り下げ状況（東より）



墳丘掘り下げ状況（北より）

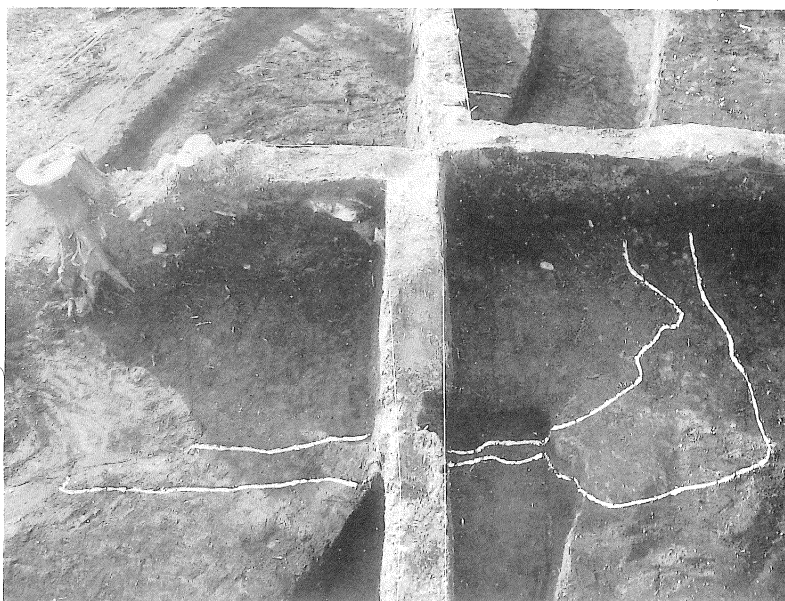
図版 4



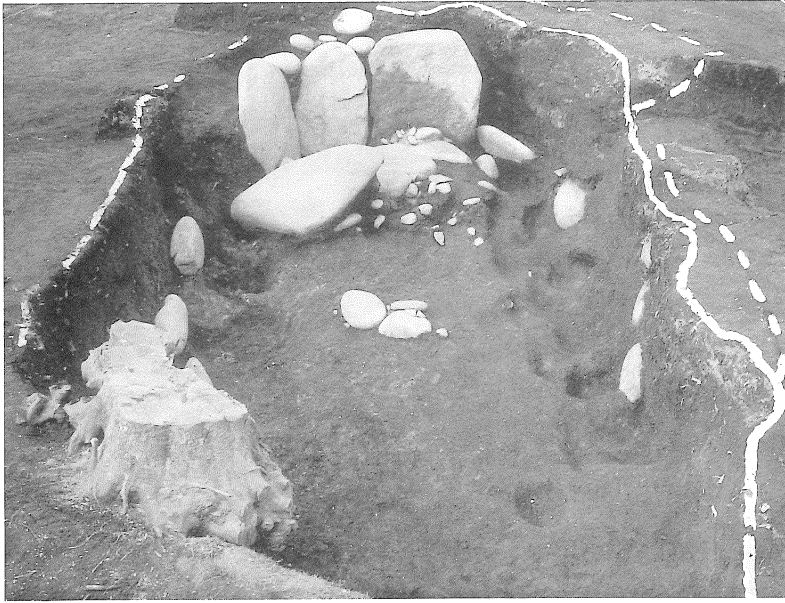
東側周溝土層（北より）



北側周溝土層（東より）



主体部検出状況（東より）



石室出土状況（南より）



玄室奥壁状況（南より）



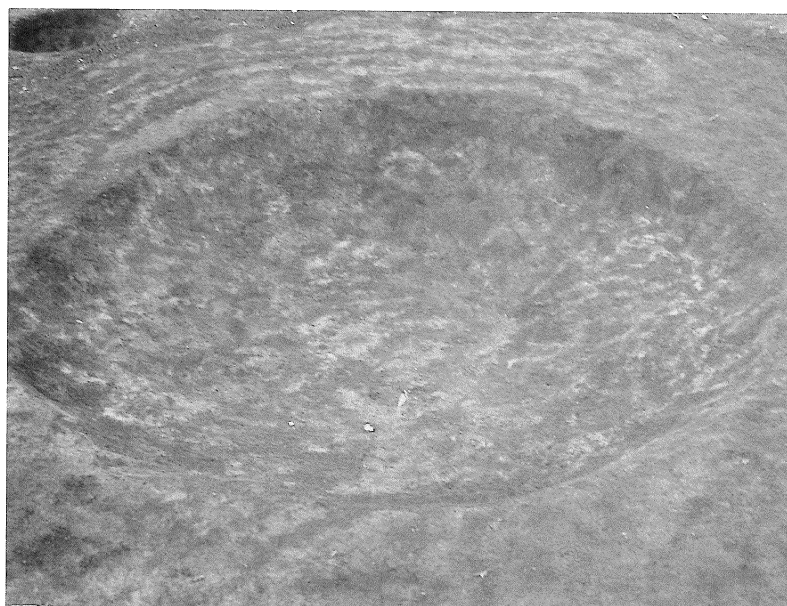
青銅製品出土状況

図版 6

石室完掘状況（南西より）



1号土坑完掘状況（北より）



1号溝完掘状況（北より）





現地説明会

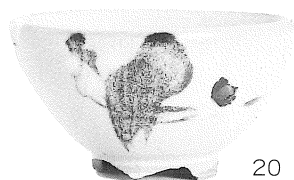
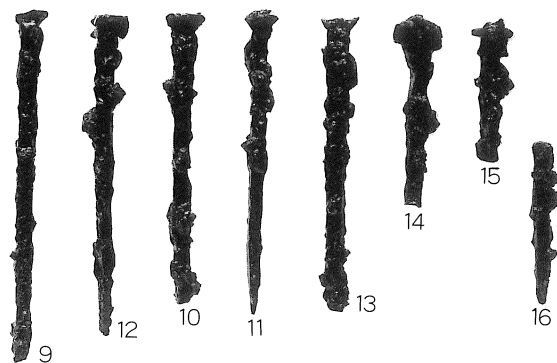
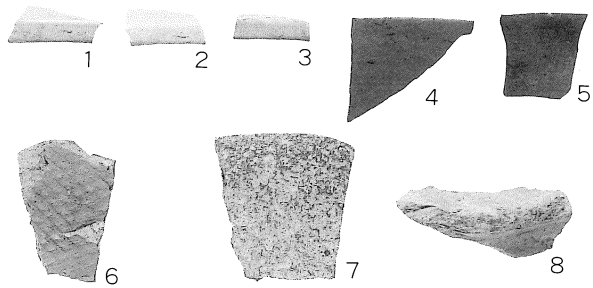


作業風景 1



作業風景 2

図版 8



1~3, 9~16, 17, 19 → 玄室内出土
 4~7 → 周溝内出土
 18 → 墳丘出土
 8 → 1号土坑出土
 20 → 墳丘表採
 ※ 番号は図版と対応する。

報告書抄録

フリガナ	セイジロウバルイセキ ウエノハルイナリヅカコフン
書名	清次郎原遺跡 上ノ原稲荷塚古墳
副書名	県道円座中津線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	大分県文化財報告書
シリーズ番号	第143輯
編著者名	井川泰成、五十川雄也
編集機関	大分県教育委員会
所在地	〒870-0021 大分市府内町3丁目10番1号 〒870-1113 大分市大字中判田ビワノ門1977番地 大分県文化財資料室
発行年月日	2002年3月29日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯		東経		調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "					
清次郎原遺跡	中津市 大字加来	44203	129	33° 33' 12"	131° 12' 13"	平成12年12月11 日～ 平成12年12月19 日	300㎡	道路建設		
上ノ原稲荷塚古墳	中津市 大字永添 字上ノ原	44203	130	33° 33' 16"	131° 12' 4"	平成13年2月5 日～ 平成13年3月2 日	600㎡			
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物			特記事項	
清次郎原遺跡		弥生時代		溝状遺構 土坑		弥生式土器				
上ノ原稲荷塚古墳		古墳時代		方形墳		須恵器 土師器 青銅製品				

清次郎原遺跡
上ノ原稻荷塚古墳

県道円座中津線道路改良工事に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成14年3月29日

発行 大分県教育委員会

印刷 東洋印刷有限会社